
書 評・紹 介

日本人口学会 編

『人口学事典』

丸善出版, 2018年11月, 797ページ

本書は、日本人口学会第67回大会（2015年）で提案・承認され、2018年11月に刊行された事典である。「辞典」ではなく「事典」である。すなわち人口学の専門用語を解説したものではなく、人口学に関連するトピック（出来事や話題）を解説したものである。116人の執筆陣による270のトピックスが収録されている。

尚、評者の専門は医療経済学であり人口学の専門家ではない。日本人口学会にも加入していない。専門外の書評で恐縮であるが、本書の巻頭に、「本書は、大学・大学院生などの初学者はもとより、新たに人口や人口問題に関心をもつようになった方々（他の分野の研究者、小中学校・高等学校の先生、自治体関係者、企業人など）を対象に、人口について関心をもった事柄を自ら調べ考える手助けとなる、わかりやすく使い勝手がよい事典を目指した」と記されており、人口問題と関係の深い医療や介護を研究対象とする評者が書評を書くのもあながち的外れではないと思っている。

本書は事典であるから、当然、明確なストーリーや強いメッセージが示されていない。しかし、全体の構成や取り上げているトピックスを見れば本書の性格が読み取れる。第Ⅰ部と第Ⅱ部に分かれており、第Ⅰ部（現代の人口問題）では、現在および今後重要性が増すと思われるトピックスを解説しており、第Ⅱ部（人口学の方法）では第Ⅰ部で述べられているトピックスを深く理解するのに必要な人口学の基礎知識や分析手法について解説している。いわば第Ⅰ部は人口学の「範囲」「射程」を示し、第Ⅱ部は人口「学」を紹介しているといえよう。

第Ⅰ部は「人口成長」「人口の性・年齢構造の変化」「長寿と健康」「出生率の変化」「結婚とパートナーシップ」「家族と世帯の変化」「労働力と雇用」「人口分布と地域人口」「人口移動」「人口政策」の10の章で構成されており、合計137トピックスが収められている。その中で評者が興味を持ったトピックスをランダムに取り上げてみると、人口ボーナスと人口オーナス、健康寿命、長寿リスク、戦後日本の出生率低下、東アジアの少子化、教育と出生力、離婚と再婚、欧米諸国のパートナーシップ、LGBT、高齢者の居住形態、医療・介護マンパワーの不足、外国人労働者問題、長時間労働の解消とワーク・ライフ・バランス、地方消滅、地域人口とコンパクトシティ、東京圏への一極集中、過疎化と人口減少社会、高齢者人口移動、人口減少と財政問題、結婚・出産・子育てをめぐる近年の政策…。まさに日本が現在直面している課題が満載である。

第Ⅱ部は「人口学の方法」と副題がついているとおおり、Ⅰ部と比較して、かなり専門的な内容になり理解も難しくなるが、それでもわかりやすく記述する努力が読み取れる。具体的には「学際科学としての人口学」「人口統計」「死亡と寿命の分析」「結婚と出生の分析」「人口再生産の分析」「人口分布の分析」「人口移動の分析」「人口と世帯の将来推計」「人口学の応用」の9章から構成され、133のトピックスが収められている。人口学を専門としたい初学者の教科書的な位置づけだといえる。

本書から読み取れるのは、人口学は他の学問領域との親和性が非常に高いという点である。たとえば評者の専門である医療経済学においても本書で取り上げられた以下のトピックスは重要なテーマである。「健康寿命」「健康格差」「生活習慣と死亡・健康」「人口減少と財政問題」「世代間移転と国民移転勘定」「医療・介護マンパワーの不足」「生活習慣と死亡・健康」「社会経済階層と死亡・健康」「医療技術の進歩と死亡・健康」。このように、本書は財政学、労働経済学、公共経済学、社会福祉学、老年学、公衆衛生学など幅広い分野の研究者にとっても有益な一冊だといえる。（遠藤久夫）